



障碍をもつ幼児の保育(8)

ーこの子と出会ったときー

津守 真
(M)

津守 房江
(F)

手を使うことその三

F 今日は、私たち二人でSくんとその仲間のお母さんたち三人で始めた小さなパン屋さんに行つてきました。本当に小さなかわいいお店でその奥のほうで、仲間たちが集まつてパンを作つたり、お店にでたりボランティアの人助けられ、お母さんたちに支えられてみんなで樂しくやつていました。Sくんの小さいときのことを私たち

は非常に印象深く思つていたので、そのこともお母さんにたずねてみたいと思つていました。

『水遊びのSくん』は、今、洗い物を一手に引き受けて

M 青年たちが働いているパン屋さんは明るくて清潔でみんなニコニコ笑いながらやつっていました。小さいとき

のSくんのことを考へると、彼は愛育養護学校の時代には長い間裏庭で水遊びに専念していたのでパン屋さんで

何かをやるということには、いつたい彼はそこの何の面白さにひかれているんだろうということは私は非常に興味を持つていたんです。そのパン屋さんで、エプロンをかけ、帽子をかぶつてかいがいしく山のように出てくる洗い物をしていました。

F 幼児期から学童期にかけて水遊びの好きなSくんが洗い物をやつていることに私は感動しました。

M そのパン屋さんの壁には最近Sくんが絵の具で描いた水彩画が貼ってありました。それは黄色と緑と青の淡い色の抽象画のようで、まるで私は彼が水遊びをやつていたときの「水のイメージ」だと思つたんです。そしてそこから思い起して考へたんだけど、Sくんは確か二歳半から三歳くらいのときから来てたんですが、その小さい頃彼は絵を描いていたんです。それは壁に腕をいっぱいに伸ばして描くような大きな絵で、水平線と垂直線をまず描いてそしてそこに渦巻きをグルグルグルと描い

た、そういう幾何学的な絵を描いていたんです。そういう絵はいまは描いていない。

F そう、垂直線と水平線とそれから渦巻きと、対角線を必ずつけて定規で引いたようにきちんととしたものを描く人だつたんです。だけどそのうちに遊びの中で絵の具のチューブをぎゅーっとしぼり出して、それが水でにじむつていうのをとても楽しんで、流しの底をいっぱいに画面みたいに使つて、いろんな色がにじんでいくのをやつていて、今日また新しい絵を見て「ああ、なるほど」と思つて興味深く思いました。

M 何か枠にしばられていたのから解放されたのかもしれませんね。絵の具のチューブを徹底的に最後までしぼり出します。もつたいないと思うんだけど、それを最後までしぼり出してしまった子が、学校にはいつの時代にもいるんですね。そんな子どもの一人だつた。

遊びの中で物質のイメージを手で追求したSくん

F 今日お母さんと話してた卵の話をちょっと話してく

ださい。

M 来始めたころの話なんだけど、家で夏休みに風呂で水遊びをしたとき、水の中に卵を割って、卵がずーっと沈んでいくのを手ですくい上げ、壊さないようにして、また水の中へ戻してまた沈んでいくのをすくい上げるつて、お母さんは話していました。

M 私もSくんがその黄身をすくい出すということを実に不思議だと思い、その手の使い方のその技術ってのはね、僕なんかにはとてもできない大したもんでした。Sくんは手をよく使う人だったからって言つたら、お母さんは「そう、この人は小さい時から手が器用だ」って言いました。

F そうそう、お母さんは、指先がとても利くんですよね、って言つて、だからホースで水遊びをしたときにホースの先をぎゅっと握つて細く勢いよく水が出るようになり、太くしてやつたり、遠くへ飛ばしたり、いろんな飛ばし方があつて、その物質のイメージをとても楽しんでいた。そのことの延長線上に今日の洗うつていう

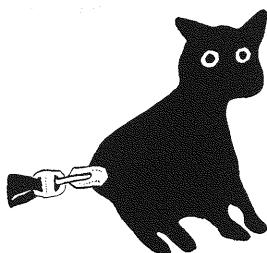
ことがあるんでしょうね。

M 水遊びの時期が長くってね、本当に水遊びしかやらないという思いを大人に抱かせるようなやり方だつたんですね。心の中にはいろんなものをたくさん抱えてる子どもだということは、じきに分かつてきて、それからその水遊びも注意してこちらがその気になつて見ていると、やり方は毎日毎日違つてることも分かつてくる。でも外から見ていると同じ水遊びとしか見えない。

F 付き合う人にとっては、何も形にならないとき、それはどういう意味があるんだろうかっていう疑問が起つて、保育者たちも親た

ちも本当にだんだんと苦痛になつてくるんですね。

M その初期のころ、まだ三歳か四歳くらいのとき、お弁当のときにお茶を入れたポットを一つ取つたら軽い、もう一つを別の手で



取つたら重い。軽い方のふたを開けたら空っぽだつた。

重い方のをふたを開けていっぱい入つてゐるそのお茶を空のポツトに注いだ。全部入れるとまた空になつた方にお茶を注ぐ。それを何度も何度も繰り返してゐるうちに小さい子どものことだからだんだんにお茶が減つてしまつてついになくなつてしまつて、床が水浸しになる。毎日お弁当のたびにね、そういうことを繰り返してゐたんですね。それからもうひとつ、私が忘れられないのは、お人形が好きだつたこと。ある一人の職員がお人形を描いたら一瞬ぱっと目が光つて、そのお人形の紙を手から離さなかつた。孤独と見えるくらい裏庭の隅で水をやつてたんだけれども、人のことをいつも心に思つていたんだなと思ひます。

F 今日私たちが訪ねて行つてもうれしさを顔には出さないで、私たちが話しかけるのを照れ臭そうな顔をしていました。

そうやつて手を使つていろんなものとふれたつていうことはぎゅつと握る指先の力が強くなつただけじやなく

て、やわらかい卵をすくい上げるような、やわらかいものに対する繊細な注意深さがあつて、こういうところに表われたのではないかと思うんですね。お母さんはその卵の遊びをやることを実に奇妙なこととして、また食べ物を遊びに使うつてことであんまりいいふうには考えなかつたでしようが、でもこうしてみるとものに対する繊細なふれ方つていうのがもともとあつたんだろうと思います。お母さんが今日、やわらかいパンをつかむときはぎゅつとやらないでそおつとトングつていうんですか、あのはさるものでそおつとつかむつていう話をされましたよね。

パン屋さんを始めるときに

M お母さんたちがパン屋さん始めるつて言つたときには、周りの大人たちは「え、この子たちがパン屋さんやつたつてパンはグチャグチャになつちやうだらうしつまみ食いするだらうし、こんな子たちが作つたパンなんか売れないんじやないか」つて言つたつて話をしまし

たよね。ところがいざやり始めてみるとこの子たちは、パンをつかむときにはそおつとつかんで、ぎゅっとつかんで食べられなくなるなんてことはしたことがないし、つまみ食いもしたことがない。これも注意したわけじゃないけれどこの子たちはしていないということでした。

F 私はいつもこの子たちに会うときに、この子たちは、なんでも心の中で分かつてると思うことが多いんです。ちょっと見ると何にも分かつてないっていう風に見えることはもちろんあるんだけれども、何でも分かつてると思つて付き合つたほうが、間違ひがない。分かつてないと思つて付き合ふと大人はその子に対して荒っぽくなる。こうやつて長い時間を通してみるとね、あの小さいときから分かっていてやつてたことが多いという気がします。

M そう、パン屋さんを中心になって始めた三人のお母さんたちがみんな日々にそのことを言つてたよね。一人一人全部違うんだから、一人一人を大事にしてパン屋さんもやろう。で、パン屋さんが採算が合うかどうかっていうことはその次のことであつて、それぞれが楽しめるようなお母さんたちも楽しめるような、そういうパン屋さんにしようといつて始めたんだということをね。

手放さずにもつていたもの

F いつも手に何かを持っていたのはいつのことだったかしら。

M 成長の途中には本当にいろんなことがありましたよ。小学部に行つたころ、いつも学校に来るときにお母さんと一緒に来るんだけれど、グレープフルーツとか夏

みかんとか丸い果物を抱えて来るのね。それで夏なんかそれを一日持つてるとぐちやぐちやになってしまふ。でもそれを手から離さない。そしたらお母さんが言うには、もうこれは本当に一日中だ。それからあと二つあるんです。きょうだいの学校で使う三角定規と、四角い

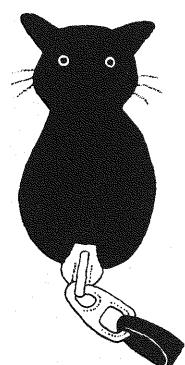
ノートと三點セットにしていつも抱えて学校に来て、学校にいる間もその三つは手に持つてかそばに置いとくかで、それを誰かが蹴つ飛ばしたり持つてつたりすると彼は怒つたのね。

F 他の子どもたちでも自分で手放せないで何かを持つている人はたくさんいますよね。例えばジュースの缶とか、ストローが好きでストロー持つてた子もいる。ぬいぐるみなんかはかえつて分かりやすいですよね。ぬいぐるみを抱いてくるとそれに頼つてのかしらと思つたりもするけれど、そういう分かりやすいものじゃなくて缶とか瓶とかそういうものが大事で、持つてる人は何人もいるんだけど、それはSくんのことを含めてどういうふうに考えたらいいのかしら。

M いま、何回かにわたつて「手を使う」つていうことについて話してゐるんだけど、手でのを持つことを最初

にテーマとして取り上げましたよね。子どもが自分の手にものをつかんだとき、その子の世界が変わるんだと思う。自分の手にものを持つことによつてそのものが自分になるものになるんであつて、手にもたない時期には、それは自分とは関係がない。手放せないでいつも手に持つてゐるということは、そのものがその子の心の奥の方と結びついたものではないかと私はいつも考えています。だから子どもが手に持つてゐるもののが何であるかを注意してみると、その子の心の中にあることが分かる。そう思つてみると非常に面白い。

F だから、変なものと思つても置いて行きなさいと



か、そんなもの持つて来ちゃダメとかそういうのは不當なことになるわけですよね。

M そう、全くその通り。それでこの子がね、三角定規と四角いノートとそれから丸い夏みかんと手に持つてゐたときには。私は非常に驚きましたうしく思つたんですね。フレーベルが言つている森羅万象の基本となる三つの形、大きな宇宙の基本が彼の心の奥深くにちゃんとどらえられているというふうに僕は思いました。

F 興味深いことだと思うけれど、何か持つてしまふと動きが取れなくなるつていうことはどう考えたらいいでしょう。

M Sくんのお母さんが、このことで困ったこともあるて、そのぐちやぐちになつたグレープフルーツを手に持つたまま電車に乗つてくる。それから学校にその三つうちどれか一つを忘れていくと家に帰つてからもう一度それを学校に取りに戻つてくる。それがもう何回あつたか分からない。このお母さんは、良くそれに付き合つたね。彼は森羅万象の基本をいつも持つて歩いてるんだ

から、彼は哲学者なんだねと、帰りがけにお母さんとおしゃべりしました。

F 森羅万象を持つて歩いているけれども現実のかばんとかそういうものは持てなくなつてしまふかも知れないと思つたんだけど、あんまりいろんなものを握りしめている場合、新たなものに発展することは難しくなつてくるんじゃないかと思うんだけど…。彼の場合とことんやると、そのことが変化していくつていうのがいつものパターンだったようだ。だから変化するんだけども忘れちやうわけじやなくてその延長線上でまた戻つてやつてているような気がします。

M それで今日もね、Sくんのお母さんがね、言つてたけど、水遊びをどうしてもやめないとき、ほつとくんじやあなくて、大事にしていつもそれを見守つてゐる。それを大事にして一緒に生活してゐるうちに変化する。

F お母さんは生活人として家庭生活などで困ることがあつたらこつちの困ることもSくんにはつきり提示する、これでいいんだわと思つてやらしておくことが自主

性を育てるように見えるけれども、本当はそういうと
きつて放してしまつていることが多いからつていう話を
お母さんがしましたね。それも私が今日考えさせられた
ことの一つだつたんです。

持つていてるものの意味つていうのは分かるけど、持つ
ているものを手放す勇気とか変化するつていうときの、
こだわりが強いつて言われる子どもにとつての大変さつ
ていうのがあるんじやないかと思つたんです。それはど
う考えます？

M そういう最中つていうのはね、一緒に付き合つてゐ
る者としてもね、いろんな疑問がわくわけですよね。これ
でいいのか、なんか違うものを提示したらとかね。僕も
そういうことを、毎日毎日考へながらやつてね。それで
彼が興味を持つようなものを、用意しておく。そういう
ときには、そうね、ちょっとはそれで遊んだこともある
けれども、まあ一日と続かない。横目で見てとたんに放
り投げたり、それでもう見向きもしない。今日お母さん
に話したら「本当にそうですよね」、たいがいそれは受

け付けられなかつたつて。この子と対話しながら日常生活を進める気持ちで付き合つていきました。Sくんのお母さんはね、本当に良くこれくらい付き合うと思うほど、例えば石鹼遊びとか、それから家の台所の容器はもうしょっちゅう空っぽなんですよつてお母さん言つてたけど、そのくらいいろんな日常の中でSくんに応じて答えながら家族の生活も整えていた。

パン屋さんを作つた親たちの心意氣

F 手を使うことと物質のイメージとがうまく調和し
て、青年期になつて二十歳を超えたときにパン屋さんを
やれるようになつてきたのだと今日お母さんの話を聞い
て思いました。初めは何の公的な支援もなくて、自分た
ちだけで始め、他の人はみんなそんな行く先の分かんな
いものに賛成する人は誰もいなかつた。三人きりで始め
た中で、今も思つてることは「人に頼らないこと」。そ
れから「欲張つて儲けようと思わないこと」とか、それ
から「楽しんでやること」。そういうことが現実的なこ

ととして生活全体を押し上げていて、お母さんも生き生きしてたし、子どもも生き生きしてたと思いました。

M 今日見ても、Sくんだけでなく、他の人たちもある人はびよんびよん飛びはねていたし、もう一人の人が僕らの帰りに自分の好きな歌を歌つてくれたしね。その歌がとってもよくってね。何の歌だつたかしら。

F 子ども贊美歌。

M 子ども贊美歌の本当にこちらも和むような歌を歌つてくれたり、それからある人は…。

F お客様が来ると出でていってパンを売りに行くとかね。もうそれなんですよね。Sくんは洗い物を一手に自分で引き受ける。

多くの親たちは市や町でやつてくれる作業所に子どもを通わせて昼間子どもが家にいなければそれでほつとするといったような具合なのに、この三人の親たちはそういうのではなんだか変だと思い、そして中高の公立養護学校の中では一番何もできないと言っていたその三人で、小さな作業所兼パン屋さんを立ち上げたのです。パ

ン屋さんを始めたと言うと、そんな大変なことと言われるけれども、「人に頼らないこと」「欲張つて儲けようと思わないこと」「楽しんでやること」を守つて、自分たちと一緒に生活できればいいと思えば、誰にでもできることなんだと話されました。今日帰りの自動車の中で言われたSくんのお母さんの話に私も同感しています。

F 今日は本当にSくんのところに遊びに行つて、楽しい秋の日を過ごした良い日でした。それでおしまいにしましょう。